企画立案の背景

三浦清史

（建築家・SMF 代表）

①　ヒアシンスハウスは、建築家でもあった詩人 立原道造が、1939 年 3 月に 24 歳でこの世を去る直前の 1937 年暮れから春にかけて、50 枚以上のスケッチを重ね、自分の週末別荘として構想したが実現はしなかった小さな建築である。立原道造は「浅間山麓に位する藝術家コロニイの建築群」を卒業設計とし、その中に描いている小住宅が、規模といい形といいヒアシンスハウスと共通するものがある。当時の別所沼は近くに、先輩の詩人である神保光太郎や画家の須田剋太などが住んでいて、ちょっとした「藝術家コロニイ」の趣がある地域だったので、学生の頃の夢を、卒業して 1 年経って、浦和の別所沼のほとりで実現しようとしたとみることができる。

②　その夢を継承し 2004 年、立原道造を敬愛する地元の有志らが新たに建設した小屋が、現在 別所沼畔に建つヒアシンスハウスで、この有志らが「ヒアシンスハウスの会」を結成し、そこから詩人の夢のもう一つの側面だった「藝術家コロニイ」を「アートプラットフォーム」と読み替えて始めた活動が SMF の母胎となる「さいたまアートフォーラム研究会」である。

③　「ヒアシンスハウスの会」ではハウスガイドのボランティアを募り、ヒアシンスハウスを公開し、小屋そのものを立原道造の建築作品として彼の業績を紹介すると共に、この建物を市民の地域活動の拠点とすることも目的の一つに挙げている。その地域活動の中には独自の朗読会や句会などの他に、他団体と連携したアーティスティックな企画もあり、竣工後、建物とその前庭を使ったインスタレーションやワークショップ、そして近くの別所沼会館を会場にした立原道造やヒアシンスハウスをテーマにするシンポジウムなどが開催されてきた。今年も「ヒアシンスハウスの会」が毎年開催する「ヒアシンスハウス夢まつり」のほかにも、日本建築家協会 埼玉地域会（JIA 埼玉）が主催するワークショップや新木場倶楽部が主催するシンポジウムが予定されている。

④　新型コロナウイルスの影響で、文化芸術活動の在り方や役割について改めて考える機会が求められている社会状況である。公共機関が所管・運営する美術館や文化施設が閉鎖となり、芸術祭の様な地域活動と結びついた現場も実施困難となり、文化芸術活動に参加を望む市民からその機会を奪っている。

⑤　文化芸術活動の在り方や役割について考えるときには、閉じた特定の領域の文化芸術活動の担い手だけで議論するのではなく、広く文化芸術活動に携わる様々な領域の人が集まり、多角的な意見を交わすことが必須だろう。しかしそのときに文化芸術に対してそれぞれの立場で様々なイメージで語り合っているのが現状で、アートフォーラム、アーツセンター、アートカウンシル、アートプラットフォームなどアーティスティックな活動の受け皿を作るプロセスデザインにおいて、それぞれの立場でのアートに対する意識を確認しあうことも求められている。